

デカくて美形な No.1 ホ
ストにお別れを告げたら
豹変しました～結婚を約
束するまでどちゅどち
ゅ♡生ハメ囲われえっち
で愛されちゃってます～

なぎさ

なぎさの妄想部屋

文庫版 / 体験版

序章

「は、ひい……っ♡ あっ、まっ、て……冬夜さ……んんっ♡」
どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡

待って、が最後まで言えたことは、一度もない。

仰向けに沈められた広いベッドの上で、私の上に乗った驚くほど綺麗な男が、こめかみから汗を一筋伝わせて、壮絶な色気のまま延々と腰を打ち付けてくる。

硬い先端がナカの柔らかいところを打ち据えるたび、お腹の奥から痺れがジンジンと指の先まで広がっていく。もう何度目かわからない。さっきイッたばかりの体はどこもかしこも敏感になりすぎていて、擦られるだけで、内側がめくれ上がるみたいに気

持ちいい。

「んあ……♡ そんな、したら、おく、へんになっちゃ……♡」

「ふふ、変になっていいじゃん？ なっちゃえなっちゃえ、ほら」
膝の裏を掴まれて、ぐっと折りたたまれた。角度が変わって、
いちばん弱いところを、固いのがピンポイントに穿ってくる。

「おッ♡♡ それらめ、らめらめっ♡♡」

「かーわいい♡」

綺麗な顔が近づいてきて、唇をぺろりと舐められる。開いた隙
間から、舌がぬるりと入ってきた。上顎の裏をくすぐられながら、
下ではごちゅっごちゅっ♡とナカをほじくり返されて、目の前に
火花が散る。

「んう……っ♡ んんんっ♡ ぶう……♡♡」

(元N.O.1ホストの冬夜さんが……お店まで辞めて、私なんかを、毎晩こんなふうに……♡)

キスの合間に、汗で頬に張り付いた私の髪を、長い指がそつと除けていく。仕草だけならどこまでも優しいのに、腰だけは一度も止まらない。

どちゅんっ♡どちゅんっ♡ぐちゅうつ♡

「ん、……はあ……美月ちゃんのまんこ、とろっとろ♡俺の私たち、もう覚えちゃったね」

「や、いわない、でっ……♡」

(おく、ごちゅごちゅ♡って叩かれるたび、おまんこが勝手にきゅうつて縮んじやう……♡♡いやって言ってるのに、自分から吸いついて、もっと奥まで引きずり込もうとして……♡♡もう、

私の体じゃないみたい……♡)

「あっ♡♡ あっ♡♡ も、また、きちやう……またイクっ、
イっちゃう……っ♡♡」

「いいよ。……俺も、そろそろ……美月、いっしょな」

腰の速度が上がる。ばちゅんっ♡ばちゅんっ♡と肌のぶつかる音が高くなって、奥のいちばん深いところを続けざまに叩かれた瞬間、視界が白く弾けた。

「イグッ♡♡ イッちゃ……ああああっ♡♡♡」

びゅくっ♡びゆるるっ♡どぶっ……♡

奥に、熱いのがじんわり広がっていく。びくびくと跳ねる私の体を、大きな腕がきつく抱きしめて、震えの最後のひとつまで受け止めてくれる。

——今日が何曜日なのか、もう思い出せない。

カーテンの隙間から見える夜景の上のほうを、白いものがちらちらと横切っていく。雪だ。地上からずっと高いこの部屋には、車の音も、人の声も届かない。時計はどこかにあるはずだけど、見る必要がなくなってから久しい。

荒い呼吸のまま溶けている私の唇に、彼は水のボトルから一口含ませてくれて、腰の下のクッションを直して、目尻に唇を落とす。してくる。

「はい、お水。……腰、つらくない？」

どこまでも甘くて、どこまでも優しい。この人はいつだってそうだ。そうやって私を大事に大事に磨きあげて——そして、絶対にやめてくれない。

ずるり、と抜けていった質量の感触に、お腹の奥がまたきゅんと疼いてしまつて、私はぞつとした。

これ以上されたら、今度こそ本当におかしくなつてしまう。そう思った瞬間、体が勝手に動いていた。本能的にシーツを掴んで、ずるずるとベッドの端へ這い出そうとする。

「こーら。どこいくの？」

背中のにしつと重みがかかった。お尻のあわいに、また硬さを取り戻したものの感触が押し当てられる。そのまま覆いかぶさられて、耳たぶをかぷりと甘噛みされた。

「ひゃっ♡」

「ぜってー逃がさねえって、言つただろ？」

低い声だった。お店で聞いていた、あの甘くて軽い声じゃない。

営業の膜が一枚も残っていない、素の男の声。

「ひっ……」

（どうしよう。ほんとに——ほんとに、逃げられない……!）
ずぶ、と後ろから沈められながら、私はとろけた頭の隅で、こ
うなってしまった日のことを思い出す——。

一章 場違いな夜

普通に、生きてきたつもりだった。

けれど、何をしてても「当然」みたいに扱われるのは、子どもの頃からだった。

うちは共働きで、私は長女で、三つ下の妹は要領がよくて、甘えるのが上手だった。妹がテストで八十点を取ると、家の中がちよつとしたお祝いになった。私が九十五点を取ると、「美月はちゃんとしてるから」で終わりだった。

ちゃんとしてるから。その一言は便利だ。心配しなくていいし、褒めなくていいし、構わなくていい。

学校では、押し付け合いになった委員を引き受ける係だった。

部活では会計だった。誰かがやらなきゃいけないことは、いつも私のところに来た。断らなかつたからだと思う。断れなかつた、のほうが正しいかもしれない。

社会人になつても、それは変わらなかつた。

中堅の事務機器メーカー、営業部の営業事務。見積書を整え、経費をまとめ、電話を取り、営業さんたちの「ねえ、これもお願いしていい？」を受け止める毎日。急ぎの資料も、面倒な集計も、誰の担当でもない雑用も、気づけば私の机に載っている。

確かに、大したことはできていないのかもしれない、と思う。資格があるわけでも、営業成績があるわけでもない。だから必死にやった。頼まれたものは早く正確に仕上げて、頼まれていないところまで整えて。それでも返ってくるのは「助かる」の一言

と、次の頼まれごとだけだった。

何が足りないのかな。

最近は、そんなことを考えることにすら疲れてきてしまった。

そんなある日だった。同期の子に、声をかけられたのは。

「美月さん、金曜あいてる？」

彼女は営業部のフロアでいちばん華やかな人で、私にも分け隔てなく話しかけてくれる。その彼女が内緒話みたいに声をひそめて言った。

「ホストクラブ、一緒に行かない？」

「……ホスト、クラブ？」

「そ。あたしの行きつけ。今ね、友達紹介するといろいろ優待あるの。初回なんて三千円だし、合わなかったら二度と行かなくて

いいし。ね？」

最初は、少し戸惑った。夜のお店なんて、テレビの中の世界だ
とっていた。でも「紹介すると優待がある」と聞いた瞬間、断
る、という選択肢がすつと薄くなった。

役に立てるなら。

——こんな時ですら、私はそれだった。

「一回だけ、なら……」

一回だけ。一回だけなら。

そう思った私が、甘かったのかもしれない。



金曜の夜の歌舞伎町は、想像していたより明るくて、想像していたより静かだった。

しつこい客引きに囲まれるものと身構えていたのに、声をかけてくる人はいない。ビルの入口には料金表の看板が律儀に立っていて、エレベーターの中の広告まで、なんだか整然としている。「今って規制が厳しいからね。昔はもっとえげつなかったらしいよ」

彼女は慣れた足取りで、あるビルの五階のボタンを押した。

扉が開いた瞬間、世界が変わった。

シャンデリア。黒い大理石みたいな床。壁一面に並んだ、キラキラしたボトルの棚。低く流れる音楽と、あちこちの席から聞こえる笑い声。きらびやかで、派手で、空気まで甘い匂いがする。

——場違いだな、と思った。

クロークでコートを預けたら、着てきたオフィスカジュアルが完全に浮いた。彼女はいつの間にかロッカーで着替えたらしく、肩の出る華やかなワンピースになっている。

そんなことも、知らなかった。

恥ずかしくて、うつむいた。

案内された席で、彼女は「担当」だという茶髪のアホと、すぐに親しげに盛り上がり始めた。私はその隣で、膝の上のバッグを抱えて小さくなっているだけだった。

「はじめましてっ！ 今日おとなりになつて付かせてもらいますっ！ よろしく願ひしますっ！」

入れ替わりでついてくれた若い男の子は、まぶしいくらい元気

だった。乾杯して、盛り上げようと次々に話題を振ってくれる。休日何してるんですか、お酒強いんですか、推しとかいるんですか。

「え、えっと……特には……」

「ですよねー！ いや、わかりますよ俺もー！」

彼は悪くない。全然悪くない。ただ、私がこの高いテンションに、どうしても乗れないだけで。返事が続かなくて、会話のあちこちに、気まずい沈黙の穴が あいた。

（どうしよう……もう、帰ったほうが、いいのかも……）

同期の子の楽しそうな横顔を見る。私がいてもいなくても、この夜は成立している。むしろ、いないほうが。

うつむいて、膝の上で指を組み直した、そのとき。

「——マジっすか」

ヘルプの子が小さく呟いて、ぱつと立ち上がった。

入れ替わりに、隣に誰かが座った。

「緊張してるね。初めて？」

普通の、しゃべり方だった。さっきまでの、異様に高いテンションじゃなくて。夜のお店の声ですらなくて、まるで昼間の世界の続きみたいな、静かな声。

それに安心して顔を上げて——息をのんだ。

あまりに、整った顔立ちだった。

輝くばかり、という言葉はこのためにあるんだと思った。落ちて着いた金色に染めた髪が、シャンデリアの光を受けて絹みたいに光っている。完璧にセットされているのに硬さがなくて、笑うと

少しだけ目にかかる。座っていてもわかるくらい体格がしっかりしていて、並んだら私より頭二つ分は大きそうだった。

「あ……」

にこり、と笑った顔がまた綺麗で、頬が勝手に熱くなる。

（しまった……帰りたいって思ってたの、態度に出てた……？）

「あ、すみませ……そう、です。はじめて、で……！」

「うん、やっぱりそうなんだ。こういうところ、慣れないよね」

「はい、すみません……」

「謝らなくていいよ。誰だって、初めては戸惑うって」

グラスに口をつける仕草ひとつまで綺麗な人だった。彼は私のペースに合わせて、ゆっくり話してくれた。お酒は無理しなくていいこと。トイレの場所。帰りたくなったらいつでも言ってい

こと。それから、どうでもいい話。駅前の工事がいつまでも終わらないねとか、この店のから揚げが実はおいしいとか。

気づいたら、肩の力が抜けていた。

（この人となら……話せる、かも）

「疲れてる顔してるね。今日、お仕事大変だった？」

「あ、はい……ちよつと、頼まれたことが多くて……」

「頼まれた、かあ」

彼はグラスを置いて、私のほうへ少しだけ体を傾けた。

「結構、任されちゃう感じ？」

「え……あ、はい。そう、かもです」

「だよね。頑張り屋さんに見えるもん。——お疲れ様」

あ、と思ったときには、もう遅かった。

じわ、と目の縁が熱くなって、視界が滲んだ。

違うんです、と言おうとした。こんなの変ですよ、って笑おうとした。でも喉が詰まって、代わりに涙が一粒、膝の上に落ちた。

だって——初めてだったから。

頑張ってるね、なんて。お疲れ様、なんて。そんなふうに言ってもらえたのは。

「大丈夫？ ……ごめん、無神経だったかな」

「ち、ちがくて……うれしくて……ごめんなさい……」

「嬉しい？」

彼は少しだけ黙って、それから、そつと息を吐いた。

「そっか。なら、よかった」

すつと差し出されたハンカチは、触った瞬間にわかるくらい上質なものだった。目元を拭われて、慌てて身を引く。

「あつ、汚れちゃう……！　きれいなハンカチなのに……」

「気にするの、そっちなんだ」

クスリと笑われて、わたわたと固まっていたら、彼はそのハンカチを、そのまま私の手に握らせた。

「じゃあこれ、あげる」

「え!?　も、もらえないです、こんな……!」

「もらつて。……泣きやんだ、記念に」

返す言葉を探しているうちに、大きな手が、ハンカチごと私の指を包んで、ゆっくり閉じさせてしまった。ふっと彼が微笑む。

「かわいい」

「……え？」

「ねえ。次も来てくれない？」

声のトーンは変わらないまま、彼はまっすぐ私を見ていた。

「今日で最後にする気だったでしょ」

「な、なんで……わかったんですか？」

「いかにも、お付き合いで来ましたって感じだったから」

「あ、はい。そう、でした……」

正直に答えてしまってから、口を押さえた。彼はおかしそうに目を細めた。

「ふふ。そういう正直なところも、かわいい」

「あう……」

頭がオーバーヒートしそうだった。かわいいなんて、家族にも

言われたことがないのに。

「でも、来てほしいな。サービスするから。……ね？」

ね、の一言に、有無を言わせない何かがあった。それに——正直に言えば、この心地よさが、忘れられそうになかった。誰かに見ていてもらえる、というだけのことが、こんなに温かいなんて知らなかったから。

「わ、わかりました……」

「約束。——あ、そうだ」

「は、はい……？」

「まだ、名前聞いてなかったね」

「あっ……！ すみません、私、美月、です。……美しいに、月で、美月」

「美月ちゃん、か」

彼は口の中で一度だけ、その名前を転がした。まるで、味を確かめるみたいに。

「……うん。いい名前」

それからポケットからスマホを出して、当たり前みたいに言った。

「連絡先、交換しよ。——俺、店では『白夜』って呼ばれてるんだけど」

彼はそう言って、画面をこちらに向けたまま、少しだけ声を落とした。

「美月ちゃんは、冬夜って呼んで。冬の夜って書いて、とうや。」

「……本名」

「ほ、本名……？」

「そ。店の誰にも教えてないから——内緒だよ」

差し出された画面に、言われるまま自分の連絡先を映してしまった。ふわふわして、何かがおかしい気がしたけれど、何かおかしいのかを考える余裕はなかった。



「——ねえ、さっき白夜とずっと話してたよね!? しかも連絡先まで交換してた!」

帰り道、駅までの数分で、彼女は三回くらい聞き返してきた。

「え、あ、うん……。えっと……びやくや、さん……？」

「そう、白夜！ あの店のN.O.1。ってか歌舞伎町でも指折りの」

「……N.O.1？」

「そ。何年も陥落なしの、殿堂入りみたいな人。めったに新規につかないし、あたしも二回くらいしか話したことないもん。今日なんで初回卓にいたんだろ……」

彼女は興奮気味に早口で続けた。

「ラッキーだったね。あ、でも指名するなら気をつけなよ？」

N.O.1の指名料、やばいから」

「し、指名料……」

サーッと、血の気が引いた。

知らなかった。あの人が、そんなにすごい人だったなんて。そ

れなのに私、さっき、あんな約束――。

スマホの中には、さっき増えたばかりの連絡先が入っている。

【冬夜】

白夜、なんて文字は、どこにもない。本名は店の誰にも教えていないと、彼は言っていた。じゃあこの名前を知っているのは――お店の外の、私だけ？

夜道で画面が光って、その名前だけが、やけにくつきり見えた。



行かない、という選択肢も考えた。

でも、約束してしまった。サービスすると言わせてしまった。

ハンカチまで、もらってしまった。このまま消えるのは、あの優しさを踏み倒すみたいで、どうしてもできなかった。

だから決めた。

一回だけ。一回だけ指名して、ちゃんと謝って、ハンカチのお礼を渡して、次で最後にしよう。

貯金残高のアプリを開いて、九十二万、という数字を確認する。社会人三年、コツコツ貯めた全部だ。N.O.1の指名料がいくらなのかは、怖くて調べられなかった。

（一回だけ。ちゃんとお別れするための、一回だけ……）

そのときの私は、本気でそう思っていたのだ。

……もらったハンカチは、洗って、アイロンをかけた。

それで、使えなくなった。こんな上質なものを日常使いにでき

るわけがない——というのは半分言い訳で、本当は、そのままとっておきたかったんだと思う。結局、クローゼットの奥の小箱にしまった。お守りと、初任給で買った腕時計を入れている、私の大事なものの箱。

それから私は、疲れて帰った夜にときどき箱を開けては、綺麗に畳まれた一枚を眺めて、「頑張り屋さんに見えるもん」の声を頭の中で再生して、ひとりで胸をきゅうつとさせるようになってしまった。

……我ながら、だいぶ重症だと思う。

二章 特別の値段

二回目の来店は、一人だった。

エレベーターが五階に着くまでの数十秒で、心臓が痛いくらいになった。発行されたばかりの会員カードを、お守りみたいに握りしめる。

（指名って、どうやって言えばいいんだろう。お金、足りるかな。謝って、お礼を言って、それで——）

「——来てくれたの？」

扉が開いた先に、彼が立っていた。

今日の冬夜さんは黒のスーツで、シャツの襟元が少しだけ開いて、店の照明を背負って、輪郭が光っていた。

「ありがと。嬉しい」

ちゅ、と。

頬に、柔らかいものが触れた。

「ふぁ!? な、な……!？」

「ごめん、かわいいから、つい。……嫌だった？」

「い、い、いやでは……! ただ、びっくりして……!」

「じゃあ、次はちゃんとやってからする」

「い、いってからって……!？」

（それはそれで、心臓がもたない気がするんですけど……!？）

くすくす笑いながら、彼は当たり前前みたいに私の手を取って歩き出す。連れて行かれたのは、前回の賑やかなフロアではなく、廊下の奥だった。重そうな扉を開けると、落ち着いた個室が現れ

る。革張りのソファ、間接照明、前の席より明らかに豪華な設え。すれ違った他のお客さんが、連れのホストに囁くのが聞こえた。

「……え、あの部屋って、月に百は使う人の……」

（つき、に、ひやく……？）

血の気が引くのと同時に、ソファに座らされていた。

「ちゃんと来てくれてよかった。来てくれなかったら、迎えに行くところだった」

「むかえ……？」

「うん。連絡先、知ってるし」

にこにこと、冗談みたいな軽さで言う。真に受けちゃいけない、と思った。こんな輝くばかりの人が、私なんかにそんなことをするはずがない。これはそういう、リップサービスなんだから。

「あ、あの！　その前に、これ……！」

私はバッグから、小さな包みを取り出した。

「いただいたハンカチの、お礼です……！　あの、私センスが全然なくて、その、冬夜さんのお好みに合うか、わからないんです……」

デパートの売り場で一時間悩んで選んだ、新品のハンカチ。おずおずと差し出すと、彼は少しのあいだ、瞬きもせず、それを見ていた。

「……くれるの？　俺に？」

「は、はい。……や、やっぱり、変でしたか……」

「——ううん」

彼は包みを受け取ると、スーツの内ポケットに、そっとしまっ

た。胸の、いちばん体温に近いところに。

「大事にする」

たかがハンカチに使う言葉じゃない気がしたけれど、その顔が
あんまり真剣だったので、私は何も言えなかった。

「あ、あの……！」

言うなら今だ、と思って、私は膝の上で拳を握った。

「実は、私……冬夜さんが、N.O.1ホストだって、知らなく
て……。それで、その……お給料も安いし、貯金も心許なく
て……。だから、あんまり、来られないかもしれない……」

今日でお別れです、まで言うつもりだった。なのに彼は、きよ
とんとした顔で首を傾げた。

「うん。それが？」

「え、だ、だから、指名料とか、私には……」

「なんだ、そんなことか」

彼はあっさりと言った。

「いいよ。指名料いらない」

「……えっ？」

「君は特別。だから、これからも気にしないで来てよ。言ったでしよ、サービスするって」

「あ、で、でも……！」

「でも？」

顔が、近づいてきた。

思わず後退ったら、背中がソファの背に当たった。逃げ場のないところへ、彼はゆっくり身を乗り出してくる。綺麗な顔が影に

なって、私だけを覗き込む。

「また、来てくれるよね？」

至近距離で言われて、もう、だめだった。

「は、はい……また、きます……！」

「ん。いい子」

ちゅ、と。今度はおでこに。

「ひう……♡」

「ごめん。事前に言うの、忘れてた」

にこりと笑う顔はどこまでも妖艶で、頭が溶けそうだった。



会計で、二度びつくりした。

一度目は、金額に。三千円。初回と同じ数字が、伝票に印字されている。

「ほ、本当に、これでいいんですか……？ あ、あの、指名料とか、お部屋代とか……」

「いいからいいから。次、また来てね」

二度目は、そのやり取りの後ろで聞こえた声に。

レジの奥にいた、年配の黒服さんだった。眼鏡を直しながら、伝票を二度見して、押し殺した声で呟いたのだ。

「……白夜さんが指名料切るの、開店以来初めて見た……」

「聞こえてるよー。その分、俺の取り分から引くという」

「いや、そういう問題では……」

「いーの、いーの」

冬夜さんはひらひらと手を振って、私をエレベーターまで送ってくれた。扉が閉まる直前まで、にこにこ手を振っていた。

帰りの電車で、ひとりで考えた。

（これって、あれなのかな。先に習慣化させて、あとからガッツリ請求される、っていう……）

ネットで「ホスト 手口」と検索しかけて、やめた。あの人の「お疲れ様」を思い出したら、疑うことそのものが、ひどい裏切りみたいに思えたから。

ただ、これだけサービスしてもらって行かないのも、逆に不義理な気がして。

（次は、ちゃんと払おう）

そう決意して、私はまた、あの店の予約を入れてしまおうのだ
た。



三回目に行くと、彼は入口で待っていた。

「嬉しいよ。ね、今度からいつもこの時間に来れる？　梓、開け
とくからさ」

「え？　で、でも、忙しいんじゃない……」

「そうでもないって。それに、レアなくらいがいいんだよ、俺は」
そういうもの……？　疎すぎてわからない。ただ、そのやり取
りの向こうで、内勤さんが予約表みたいなタブレットを持ったま

ま頭を抱えているのが見えた。金曜のその時間に、何本も線が引かれて、消されていた。

個室に着いてから、私は財布を握りしめて申し出た。

「今日は、ちゃんと払わせてください」

「いーって、いーって。来てさえくれれば」

「そんな……」

「それよりさ」

彼はソファの上で頬杖をついて、ちよつと悪戯っぽく笑った。

「今度、外で会わない？」

「え？　そと、で？」

「うん。デートしようよ」

どき、と心臓が跳ねて、それから慌てて理性が追いついた。同

伴、というやつだろうか。それはたしか、お店の外でご飯を食べ
てから一緒に入店する、あれ。でも、こんな人の時間を、店の外
でまで私なんかに使わせるわけには。

「や、やめとく……です」

「なんで？ 俺が嫌？」

「そんな！ そんなわけなんです、でも、冬夜さんが私となん
て……」

「——美月ちゃん」

声が、ずっと真剣になった。

「俺は、美月ちゃんがいいの」

「うう……」

どうしてこの人は、こういうことを、こんなまっすぐ言うんだ

ろう。心臓に悪いにもほどがある。俯いた私の頭に、ぽん、と大きな手が乗った。

「……無理はしなくていいよ。デートはまた今度にしようか。でも、来週は必ず来てね？」

「はい……」

それから彼は、ふと思ひ出したように言った。

「そういえば、先週の雨だった日、残業って言ってたでしょ。

ちゃんと傘買えた？　またコンビニの置き忘れみたいなビニール

傘なんじゃないの」

「え……なんで、覚えて……」

「覚えてるよ」

彼は当たり前みたいに笑った。

「美月ちゃんのこととは、全部」

営業トークだ。わかってる。わかってるのに、頬が熱くなるのは止められなかった。



次の金曜、私は少し早く着いてしまった。

めずらしく残業がなくて、駅で時間を潰すのも落ち着かなくて、結局そのままエレベーターに乗ってしまったのだ。

「申し訳ありません、お部屋の準備がまだで……。少しだけ、こちらでお待ちいただけますか」

黒服さんに通されたのは、フロアの端のソファだった。ウーロ

ン茶を置かれて、はい、と小さく返事をして——顔を上げたところで、見つけてしまった。

フロアの向こう。シャンパンの並んだ華やかな卓に、冬夜さんがいた。

常連らしい、綺麗なドレスの女の人。冬夜さんは完璧な角度で微笑んで、完璧なタイミングでグラスを掲げて、完璧な相槌を打っている。個室で私に向ける顔とは、少しだけ違う。もっと遠くて、もっと綺麗な人に見えた。

なるほど、あれがN.O.1の営業なんだ、と思って——ふと、気づいた。

触れないのだ。一度も。

乾杯はグラス越し。お酌は両手で、指先は決して重ならない。

隣に座っているのに、肩と肩の間には、定規で引いたみたいな隙間がある。女の人が距離を詰めても、彼は笑顔のまま、ずっとグラスを取りに行く動きで躲してしまふ。

「——白夜さん、お客さんに触らないんで有名なんすよ」

振り返ると、初回の日のヘルプの子が、おしぼりを抱えて立っていた。

「デビューからずっとそうっす。塩とか塩対応とかじゃなくて、なんつーか……線？　線が、あるんすよね」

「そう、なんだ……」

「そっす。……だから俺ら、最近ちょっと混乱してるんすけどね」
どういう意味ですか、と聞き返そうとしたとき。

向こうの卓で、冬夜さんが顔を上げた。

目が合った、と思ったときには、もう彼は立ち上がっていた。女の人に一言だけ断って、まっすぐこちらへ歩いてくる。さつきまでの完璧な微笑みが、途中でほどけて、子どもみたいな笑い方になった。

「美月ちゃん、来てくれたんだ。早いじゃん、うれしい」

「あっ、あの、待ってますので……！ お仕事の途中なのに……！」

「いいの。すぐ行くから、待ってて？」

彼は私の頭にぽん、と手を置いて、それから卓へ戻っていった。残されたソファの上で、私は動けなくなった。

刺さっていたのだ。フロア中の視線が。シャンパンの卓の女の人、その隣の卓の人、グラスを持ったまま、こちらを見てい

た。値踏みするみたいに、私の靴から鞄まで。

(……なんで、私なんか)

頬とおでこに触れた、柔らかい感触を思い出す。

(……考えちゃ、だめ)

考えたら、勘違いしちゃいそうだから。それが勘違いだってわかったら、立ち直れないから。



五回目。六回目。七回目。

気づけば、金曜のあの時間は、私の一週間でいちばん大事な時間になっていた。

会社でどれだけ雑用を積まれても、金曜の夜があると思えば頑張れた。彼は毎回、私の一週間を覚えていて、続きから聞いてくれた。プレゼン資料、間に合った？ あの意地悪な営業さん、また美月ちゃんに押し付けたの？ ……誰にも話していないことを、この個室でだけ、話せた。

そして毎回、会計は三千円のままだった。

「ほんと、毎回毎回……申し訳ないです」

その日、私はとうとう頭を下げた。冬夜さんはグラスを置いて、うーん、と天井を見上げた。

「ほんと、気にしなくていいんだけどなあ……。あ、そうだ」

「な、なんですか？」

「じゃあさ。美月ちゃんも、俺にサービスしてくれる？」

「サービス……？ 私にできることなら……」

「ちゅーして」

「……はい？」

一瞬、言葉の意味がわからなかった。

「俺とちゅーしてくれたら、嬉しいな」

「なっ……!？」

飲みかけのウーロン茶を吹き出しそうになった。冬夜さんは頬杖をついたまま、じっと私を見ている。

「……したこと、ある？」

「………」

「ないんだ」

声が、一段甘くなった。

「そしたら、俺が初めて？」

「ま、まだ、するって言ってな……！」

言い終わる前に、ソファが沈んだ。距離が詰まる。金色の髪がさらりと揺れて、綺麗な顔が、私の影になる位置まで近づいてくる。

「……もらってもいい？ 美月ちゃんの、初めてのちゅー」

だめです、と言うべきだった。ここはお店で、この人はホストで、これはぜんぶサービスなんだから。

なのに私は——こくり、と頷いてしまっていた。

「……嬉しい」

その言い方が、あんまりにも蕩けそうで。これも演技なの、と思う間もなく、唇に、柔らかいものが触れた。

ちゅ、と音を立てて、離れる。

「ん、……っ」

「かわいい」

こっん、とおでこを合わせられた。至近距離に、信じられないくらい整った顔がある。私、いま、この人と。

「もっかい、していい？」

「え……？ んう、♡」

返事を待たずに、唇が重なった。

今度は、離れなかった。角度を変えて、何度も。下唇をやわく食まれて、隙間をぺろりと舐められて、頭の芯がぼーっと痺れてくる。

「ふ……♡ んっ……あ……♡」

（私、お店で……ホストさんと、こんな……）
やっと唇が離れたとき、口の端から、つ、と涎がこぼれてしまった。

恥ずかしさで死にそうになる私の目の前で、彼はそれを、ためらいなく舐め取った。

「あっ、そんな……！ き、汚いから……！」

「——誰が、そんなこと言った？」

真剣な、ちよつと怖いくらいの顔だった。

「あ……」

「汚くないからね？ むしろ……何度でも飲みたいくらい、ほしいよ」

「あ、あう……」

(なんで……そこまで……?)

疑問は、次のキスに塗りつぶされた。



それから、キスが習慣になった。

個室なのをいいことに、会うたび、挨拶みたいに唇が重なる。

挨拶にしては長すぎるキスに、私はいつまでも慣れなかったけれど、拒む気持ちは、もうどこにもなかった。

その日は、彼の膝の上だった。

「ん……っ♡ ぐう……♡ ふ、あ……♡」

横抱きに乗せられて、後頭部を大きな手に支えられて、口を開

かされて、舌を絡め合う。じゅる、と吸われるたび、腰のあたりが甘く痺れて、体から力が抜けていく。

（こんなこと……いけないのに……お店で、こんな……♡）

「はあ……美月ちゃん、キスうまくなったね」

「そ、それは……冬夜さんが、教えた、から……」

「そうだよ。ぜんぶ俺が教えたの」

満足そうに笑って、また深く重ねてくる。んっ♡と鼻から声が抜けて、彼のスーツの胸元を、ぎゅっと掴んだ——そのとき。

お尻の下で、何か、硬いものが動いた気がした。

「あっ……♡ な、なんか……硬いのが……」

「ん……はあ。ごめん、勃っちゃった」

「え？ た、たつって……」

「ふふ。ちんこ、大きくなっちゃった。美月ちゃんが、あんまりかわいいから♡」

かああつ、と顔から火が出た。とろん、と細められた目の色気がすさまじくて、直視できない。

「そ、そういうこと、言わないでくださ……！」

「……エッチ、する？」

「……えっ!？」

真剣な顔だった。

えっち。エッチ。私が？ 冬夜さんと？

頭が完全にオーバーヒートして、口を開けたまま、はくはくと酸欠の金魚みたいになってしまった。

彼は笑わなかった。かわりに目を細めて、少しだけ、首を傾げ

る。

「……キスがまだだったってことは、エッチもしたこと、ないよね？」

「う……」

なぜか、期待に満ちた目だった。

引かれるかもしれないと怖いはずなのに、私はこの人の前だと、どうしてか嘘がつかない。……こくり、と頷いた。

「そっか。そっかあ……初めてかあ……」

やけに嬉しそうな、うっとりした目で言われた。キスしたときと、同じ目だ。

「じゃあ——予約したい」

「よ、予約って……！」

「あ、もちろんここで最後までは、しないよ」

ん、と彼は私の髪をひと房すくって、口元に運んだ。

「——でも、練習だけ、しとこっか」

「……れん、しゅう……？」

話が読めない。ど、どういうこと……？

「気持ちよくなる練習」

至近距離で、整った顔が囁く。吐息が耳の縁にかかって、それだけで頭の芯が痺れた。

「初めてって、緊張するでしょ。体が硬いと、痛いし。……だから先に、気持ちよくなるのだけ覚えとこ？　俺が、教えてあげる」

「そん、そんな、こと……！」

「大丈夫。嫌になったら、すぐ言って。ぜったい、やめるから」

おでこに、ちゅ、と唇が落ちる。

「……だから、ちよつとだけ。ね？」

「は、はい……」

思わず、言ってしまった。

こんなときまで断れない自分に、頭の隅で呆れる。でも——胸の奥のどこかが、とつくに頷きたがっていたことも、知っていた。

「ん。じゃあ……座り直そっか」

膝の上から降ろされて、今度は彼の脚のあいだに、背中から抱え込まれるかたちで座らされた。ソファは大きいのに、逃げ場がない。背中ぜんぶに、彼の体温がある。

「これなら、顔見られなくて恥ずかしいくないでしょ」

（う、これはこれで、恥ずかしい……！）

それに——ここは、お店だ。重厚な扉一枚の向こうは、廊下で、その先には。

ちら、と視線が、勝手にドアへ泳いだ。

耳のすぐ横で、くす、と笑う気配がした。

「……ドア、気になる？」

「っ、だ、だって、ここ、お店……」

「うん、誰か来ちゃうかも」

軽く言わないでほしい。なのにその一言で、心臓がどくと跳ねた。怖い、のとは違う何かで。

「——だから、お声は、ちいさく、ね？」

大きな手のひらが、ブラウスの上から、おなかを撫でた。ゆっくり上がってきて、胸のふくらみのふもとで止まる。

「さわるよ。……ああ、やわらか」

服越しに、やわやわと包まれる。布とカップ越しなのに、手の熱だけが、じんわり染みってくる。

「ん……っ、ふ……」

「……先っぽ、どこにあるか教えて？ 服の上からだ、わかんないなあ」

（ぜ、ぜったい嘘……！）

わかっていくくせに、指は先端のまわりばかり、くるくると円を描く。布がこすれて、そこがつん、と尖っていくのが、自分でもわかってしまう。

「や……なんで、そこばっかり……っ」

「ん？ 教えてくれないから、探してるんだよ」

「っっ……っ！」

もじ、と腰が動いてしまった。その動きを、後ろの彼は、ぜんぶ感じていたはずだった。

「……お。いま、自分から押しつけたね？」

「し、してな……あんっ♡」

布越しに、先端を、きゅ、とつままれた。

「ここでした。……ほら、もうこんなに硬くしてる。服の上からでも、わかっちゃうくらい」

「や、やだぁ……っ」

「ねえ。ボタン、ふたつだけ。……開けさせて？」

耳元の声は、どこまでも優しい。なのに指はもう、いちばん上のボタンにかかっている。

「ふ、ふたつだけ、なら……」

「ふふ、わかった」

ぷつ、ぷつ、と。ボタンがふたつ外されて、鎖骨の下に、空調の涼しい空気が触れた。開いた隙間から、大きな手が、するりと滑り込んでくる。

「ブラ、ずらすよ。……脱がさないから、安心して」

（それ、安心して言うの……？）

カップが、くい、と下から押し上げられて、こぼれた素肌のふくらみを、手のひらが直接包んだ。

「あ……っ♡」

「はあ……。やば。手に吸いつく」

熱い。さっきまでの布越しが、遠い昔みだいだった。指の腹が、

尖った先端を、こりっ♡と直接転がす。

「んんっ♡ や、それ……っ♡」

「服の上と、直接。……どっちが好き？」

「し、しらな……あ、んっ♡」

「じゃあ、わかるまで両方しよっか」

こりこり♡と直接つままれたかと思えば、カップ越しにやわく揉まれて、また中へ。布と素肌を行き来されるたび、感覚をかき混ぜられて、頭の芯がぼうつとしてくる。

——カラ、と。

廊下の向こうで、グラスの鳴る音がした。

「っ……！」

体が跳ねた。ワゴンの車輪の音。近づいてくる。誰かが、この

廊下を。

「しー……」

彼は、指を、止めなかった。

「ん、んっ、……んう……っ」

「……ん、声我慢できてる。えらい」

（こ、こんなときに、褒めないで……！♡）

足音が、ドアの前を、ゆっくり通り過ぎていく。そのあいだも乳首はこりこりと転がされ続けて、私は自分の手で口を押さえた。体の内側だけが、どんどん熱くなる。

音が、遠ざかった。

「……はい、行っちゃった。ばれなくて、よかったね？」

「……っ、い、意地悪……！」

「ごめん、美月ちゃんがかawaiiから、いじめたくなっちゃった」
くす、と笑って、彼はブラウスの中の手を、ゆっくり引き抜いた。よかった、終わった——と思ったのは、一瞬だった。

「じゃ、次。……下も、練習しよっか」

「ス、スカートは……！」

「めくらない。……中に、手だけ入れるから」

太ももの上に手のひらが乗って、スカートの布ごとゆっくり撫でながら、裾から、するりと入ってくる。ストッキング越しの内腿を、指先がなぞった。

「ひ、う……っ」

「力、抜いて。……ほら、ここ」

指が、脚の付け根に、そっと触れた。

「……あつ。ストッキング越しなのに」

「や……っ、いわないで……」

「それに――」

くに、と。布の上から、真ん中を優しく押される。

「ん、うっ……！♡」

「……湿ってるね、ここからでもわかるくらい」

（うそ……っ、胸だけで、私……♡）

かあつと、顔に火がついた。羞恥で目の前がぐらぐらするの、彼の指は濡れた布の上を、くち、くち♡と小さく往復する。

「やだ……は、恥ずかし……っ」

「なんで？ 練習の成果が出てってことだよ？」

「そ、そういう問題じゃ……あ、んっ♡」

「じゃあ最後の練習。ストッキング、お腹から手入れるよ。……破りたくないから、じつとしてて」

ウエストのゴムが、くい、と引かれて、大きな手が、ストッキングと下着、二枚の布の内側へ、おなか伝いに滑り降りていく。何にも守られていないそこに、指先が、直接触れた。

くち、と。

自分でも聞いたことのない音が、スカートの中から聞こえた。

「や……っ!？」

「——すご。とろっとろ」

彼の声から、笑いが消えていた。かわりに、低い熱が灯っている。

「や、やだ、それ、いわないで……っ」

「言うよ。初めてなのに、こんなに上手に濡れて。……ほんと、かわいい」

ぬる、ぬる、と割れ目の表面を、蜜を広げるみたいになぞられる。スカートの中で何をされているか見えないぶん、感覚だけが何倍にも膨らんでいく。

「あっ♡ん、んっ……♡や、おとが……っ♡」

「いい音……で、ここが今日の本題」

上のほうの、いちばん敏感なところに、指の腹が、ふわりと乗った。

「ひうつ!?!♡」

腰が、跳ねた。柊の違う痺れが背骨を駆け上がる——のを、後ろから抱く腕が、やんわり抑え込んだ。

「みーつけた」

「ま、まって、そこ、へん……っ♡」

「ここ、クリっていうんだよ？ ……美月ちゃんの、気持ちよくなるための場所」

くに、くに♡と、皮の上からクリを揺らしながら、彼は授業みたいに言う。

「本番までに、ここで気持ちよくなるの、覚えとこうね」

「や、そんな、おぼえる、なんて……ああっ♡」

「お声、しーだよ？」

「っっっ、ん、ん……っ♡」

手の甲を、自分の口に押しつける。廊下の音は、もうしない。でも、ここはお店で、ドアの向こうには誰かがいて——そう思う

ほど、スカートの中の指の感触が、鮮明になっていく。

（お店で……スカートの中さわられて、こんな……いやらしくなっちゃってる、私……♡）

くにくに♡と、クリは指の腹で優しく転がされ続ける。お腹の奥から、知らない波が、せり上がってくる。

「ふ……っ、ん、んっ♡ や、なんか、へん……なんかきちゃう……っ♡」

「それでいい。こわくないよ。……そのまま、力抜いて」

「んん……っ♡ む、むり、こわい……っ♡」

「大丈夫。——俺が、ちゃんと抱いててあげるから」

ぎゅ、と後ろから抱く腕に力がこもった。逃げ場のない体の真ん中で、くりっ♡と、クリがひときわ深く押しつぶされる。

（だめ、こえ、でちゃう……っ♡♡クリ、指の腹でくちゅくちゅ♡って潰されて、腰が勝手に浮いちゃう……っ♡♡ドアの向こうに人がいるのに、お店で、私、こんな……♡♡くる、なにか、くる——っ♡♡）

「~~~~っ!!♡♡♡♡」

声にならない声を手のひらに押し殺して——私は、生まれて初めて感覚に吞まれた。

腰がぐくぐく跳ねて、爪先がきゅうつと丸まって、スカートの中で、びく、びくっ、と何度も震える。

「……じょうず」

耳元の声が、とろけるほど甘かった。

「いまのが、いく、だよ。……練習ひとつめ、達成」

「は……あ、は……あ……♡」

「……で、ほんとはね」

指が、まだ離れない。いったばかりのクリの輪郭を、ぬる、と一周なぞる。

「ひ……っ!?!♡ ま、まって、いま……っ♡」

「そう、いったあとして、もっと気持ちいいんだよ。……もうひとつだけ、覚えとこ?」

「む、むり、むり……っ、んうう……っ!♡♡」

ぬるぬる♡と、敏感になりきったクリを蜜ごと撫で回されて、引いたばかりの波が、すぐに戻ってくる。一度目より近くて、一度目より深い。

「や、まって、こえ、こえでちゃ……っ♡」

「我慢、できる？ ……ここ、お店だよ？」

わかってるくせに。指はゆるむどころか、クリの根元を挟むみたいにして、くりくり♡と左右から揺らしてくる。

「んっ、んっ、くっっ！♡」

「ふふ、またイけそ？」

「だ、って、りょうほうは……っ♡」

空いていた左手が、ブラの中に戻ってきた。尖ったままの乳首を、こり、と摘まれて、下のクリと、いっしょにかわいがられる。（乳首と、クリと、いっしょ……っ♡上でこりこり♡されると、下がびくって跳ねて、下をくりくり♡されると、上がじんってして……♡♡ぐるぐる回って、逃げ場が、どこにも……っ♡♡また、さっきのが、きちゃう……っ♡♡♡）

「ふ……っ、んー……っ！♡♡♡」

「……はあ。声我慢してる顔、たまないね」

耳元の声が、一段、低くなった。余裕の衣の下から、素の欲が、ちらりと覗く。

「——ほんとだね。練習って言っとかないと、今ここでぜんぶ食べちゃいそうだから、そう言ってるんだよ、俺」

「ふ、え……？ や、んうう……っ！♡♡♡」

（だめ……っ♡♡さっきイったばかりのクリ、まだくりくり♡されて、乳首まで一緒に……♡♡♡くる、さっきより、はやくくる——っ♡♡♡）

「んうぐう……っ♡♡♡~~~~っ！！♡♡♡♡♡」

言葉の意味を確かめる前に、二度目は、あっという間に来た。

彼の腕の中で、私はまた、声を殺して跳ねた。

「……今日は、ここまで」

するり、と手が引き抜かれて、スカートの裾が丁寧に直された。振り向く力もなくて、彼の胸に後頭部を預ける。心臓がまだ、どくどくいっている。……背中当たる彼の心臓も、少しだけ、速い気がした。

「よくできましたの、ご褒美」

ちゅ、と、唇にキスが落ちる。それから彼は、ずれたブラを直し、ボタンをひとつずつ留め直してくれた。乱れた髪まで、指で梳いて整えて。

「——はい。元通り」

そんなわけ、なかった。

服は元通りでも、体はもう、ぜんぶ覚えてしまっていた。この人の指も、声も、イくということも。

「……あの、冬夜さんは……その……」

お尻の下の、硬いものの気配に気づいて、おそろおそろ聞くと、彼は、小さく吹き出した。

「いーの。俺のは」

耳元で、囁く。

「……ぜんぶ、予約の日の楽しみにしてるから」

（よやくの、ひ……）

その言葉の意味を、ちゃんとわかっていたのに。わかっている私は、嫌だと思えなかった。



彼との連絡は、いつの間にか、毎日になっていた。

朝は「おはよ。今日もがんばって」。お昼には「ちゃんと食べた?」。夜は「おつかれさま。今日はどんな一日だった?」——返信すると、どんな時間でも、秒で既読がつく。

(お仕事、大丈夫なのかな……)

心配になるくらいなのに、通知が光るたび、心臓が跳ねる。だめだと思いながら、最近、スマホを裏返して置けなくなった。

「——なんか最近、つやつやしてない?」

お昼休みの給湯室で、隣の席の先輩に言われて、マグカップを取り落としかけた。

「え!? そ、そんなことは」

「ふーん……? もしや、彼氏できた?」

「で……っ!? できてないです! 違います! ぜんぜん違います!」

「そこまで否定されると、逆に怪しいんだけど」

にやにやと見送られて、私は逃げるように給湯室を出た。

（彼氏じゃ、ない。彼氏じゃないの。あの人はホストさんで、あれはお仕事で……勘違いしちゃ、だめ）

言い聞かせる。毎日、言い聞かせている。

言い聞かせながら——ポケットの中のスマホが震えた気がして、確かめてしまう自分は、たぶんもう、だいぶ手遅れだった。



また、別の日。

その夜は、個室に着いて、いつものように一週間の報告をしていた。その流れで、なんの気なしに、話したのだ。

「あ、あと、ちょっとだけいいことがあって。営業の人が、資料をまとめたお礼につて、缶コーヒーくださったんです」

「……へえ」

「最近よくお仕事を頼みに来る方で。あ、でも、頼まれごと自体はいつものことなので」

「その人、よく美月ちゃんの席に来るんだ？」

「そうですね。用がなくても前を通られる気が……あ、通楼道だ

から、ですね」

「……………」

グラスの置かれる音が、こと、と鳴った。

その夜の冬夜さんは、それから、いつもより静かだった。キスのあと、私を胸の中に閉じ込めるみたいに抱きしめて、長いこと、そのままだった。

「はあ……ほんっと、かわいい。食べたいくらい」

「み、耳元で、そういうこと……っ」

「ねえ、美月ちゃん」

耳に、唇が触れたまま。

「俺、美月ちゃんのことは全力で甘やかすって決めてるけど——
浮気だけは、許さないから」

声が、ずっと半音、低くなった。

「う、浮気……？　だ、誰と、ですか……？」

誰と？　私が？　この人以外と？　意味がわからなくて目を白黒させていると、抱きしめる腕の力だけが、ぎゅう、と増した。

（な、なんの話……？　……あ。もしかして、これも……ときめかせるための、営業……!?!）

すごい。ホストさんというのは、架空の修羅場まで演出してくれるらしい。

見当違いの感心をしている私の頭上で、彼が小さく「……この顔は、伝わってないな」と呟いた。

「また、ちゃんと教えてあげる。……こっちおいで、美月ちゃん」
膝の上に、向かい合わせて抱え上げられる。キスが、すぐに深

くなった。

「ん……っ♡ ふ、あ……っ♡」

「今日も、練習しょ？」

スカートの中に、大きな手が滑り込んでくる。ストッキングと下着を、慣れた手つきで膝までおろされた。もう何度目かわからない「練習」に慣らされた体は、その手つきひとつで、簡単に火がついてしまう。

ぬぷ、と。

指が、ナカに沈んできた。

「あ……っ♡」

最初の頃は、割れ目を撫でられるだけだった。それが指一本になり、二本になり——今ではもう、ズブズブと根元まで飲み込ん

で、彼の指のかたち、悦んで吸いついてしまう。

「はいった。……ぜんぶ覚えちゃったね、ここ」

「い、いわないで、くださ……あっ♡」

くち、くちゅ♡と、二本の指がばらばらに動いて、ナカを掻き回す。弱いところを的確に押し上げられて、腰が跳ねた。

「あっ♡ あっ♡ や、そこばかり……っ♡」

「だって、好きでしょ、ここ。……ほら、もう」

こりっ♡と、親指がクリを転がした瞬間、あっけなく一度目が弾けた。

「んう……っ！♡♡」

「もうイッチやったんだ、敏感になってるね」

びくびくと跳ねる私を膝の上に抱え直して、彼の指は、止まら

ない。二度目。三度目。声を殺す余裕まで剥がされて、私は彼のスーツの胸元に顔を埋めて、ただ震えるしかなくなっていく。

「や……あ……♡ も、とけちゃう……♡」

すっかり溶けて、くたりともたれかかった、そのときだった。

「ねえ、美月ちゃん」

耳に、唇が触れたまま。

「——結婚しょ？」

「……………ええっ!？」

飛び上がりそうになった私を、腕はびくともせず抱きとめていた。

け、結婚。結婚って言った、いまこの人。これまでもさんざん甘い言葉をもらってきただけ、これは、さすがに。

「む、むりですう……！」

「なんで？」

ずいっと、顔を近づけられる。この顔の圧には、本当に弱い。

「な、んでって……」

「……まさか。他に男いるとか、ないよな？」

ふっ、と。

声のトーンが、下がった。

ぐり、と。ナカに入ったままだった指が、答えを急かすみたい
に、いちばん弱いところを押し上げる。

「びあっ!?♡ ちが……っ、いませんっ、いませんから……っ♡」

「……ほんとに？」

ぐりぐり♡と、咎めるみたいにな、そこばかりを捏ねられた。気

持ちよさと必死さがごちゃ混ぜになって、私はぶんぶんと首を振る。

「ほんとです……っ♡ 男の人なんて、この方、いたことも……あ、あっ♡」

「——そっか。よかった」

にっこり。いつもの笑顔に戻っていた。ナカの指も、ご褒美みたいに、ゆるく優しくなる。

「じゃあ、いいじゃん。俺、結構甲斐性あると思うよ？ 他にもいくつか店持ってるし、美月ちゃんと結婚したら、店に出るのもやめるよ」

「え、と、えと……！」

すらすらと出てくる言葉に、頭がついていかない。店を持って

る？ やめる？ 何の話？

「だめ？」

こてん、と首を傾げる。やわらかい金色の髪が、さらりと流れる。

「私が……冬夜さんと、結婚……」

「うん、そう。結婚」

（もしかして……本当なの？ 本当に、私のこと……）

これまでの彼の態度が、ぐるぐると頭を巡った。指名料を取らないこと。全部覚えていてくれること。触らない主義だっていう人が、私にだけくれるキスと、この指と。そして、この言葉。いくらホストでも、冗談で結婚なんて言わないんじゃないか。

だとしたら——すごく、嬉しい。

でも。

(……だめ。こんな頭で、頷いちや、だめ)

こんな大事な返事を、指でイカされたばかりの、とろとろの頭でするのは——彼にも、この言葉にも、失礼だ。

「か……考えさせて、ください」

声が震えた。怖くて、嬉しくて、気持ちの置き場所がわからなかった。こんな大きな幸せを、いきなり両手で受け取れるほど、私は自分を信じていない。

彼は少し驚いた顔をして——それから、なぜかとても嬉しそうに笑った。

「うん、もちろん。気持ちの整理がつくまで、待ってるから」
手を取られる。指先に、恭しく唇が落ちた。

「……でも、期待してる」

手の甲に触れた熱が、帰り道になっても、ずっと消えなかった。



それから数日、私は、たぶん人生でいちばん浮かれていた。

仕事中にふっと手の甲を見てしまう。夜、ベッドの中で「結婚しよ？」を再生して、枕に顔を埋めてじたばたする。カレンダーの金曜日に、意味もなく丸をつける。

——このときの私は、まだ知らなかった。

浮かれた足元の地面が、あんなに簡単に、抜けてしまうことを。

体験版は、ここまでです。

このあと『さようなら』の一言が、九年間、誰にも本気にならなかった男の仮面を剥がします。

「……やっと捕まえた」

「なれよ。……俺はもう、とっくにおかしいんだから」

「かわいすぎるでしょ、俺の奥さん。——今夜は、眠らせねえから」

豹変した彼にどんなふうに愛されるのか、ぜひ本編で体験してみてください。

最後はいちゃラブ甘々のハッピーエンドです！

完全版は序章＋全五章＋終章〈彼視点〉、約6万字。
ここまで読んでいただいたのは、その冒頭部分です。

▼ この続きは、完全版で

DLsiteにて発売中です。サークル「なぎさの妄想部屋」の作品ページからお求めいただけます。

気になったら、お気に入り登録だけでもどうぞ。